

- (3) *Adris tyrannus amurensis* Staudinger アケビコノハ
1949.9.5
- 11 Notodontidae シャチホコガ科
- (1) *Phalera fuscescens* Butler ムクツマキシヤチホコ
1949.8.17
- 12 Limantriidae ドクガ科
- (1) *Euproctis similis* Fuessly モンシロドクガ
1947.6.30
- (2) *Euproctis pseudoconspersa* Strand チャドクガ
- 13 Lasiocampidae カレハガ科
- (1) *Gastropacha populifolia* Esper ホシカレハ
1945.6.5, 1949.7.25
- (2) *Philudoria alubomaculata* Bremer タケカレハ
1946.6.10
- (3) *Dendrolimus spectabilis* Butler アツカレハ

ユリクビナガハムシについて

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 3 6)

高 橋 寿 郎

ユリクビナガハムシ *Lilioceris merdigera* (LINNÉ) は LINNÉ がヨーロッパ産で *Chrysomela merdigera* として記載された種である (Syst. Nat. ed. p.375, 1758)。

ヨーロッパでは良く知られている種のように、E. RETTER の Fauna Germanica IV の中でカラー図説されている (p.80, Tafel. 142, f. 3, 1912)。また、G. PORTEVIN の Coléoptères de France Tome III の中でも (p.190, f. 349, 1934) 図をつけて解説がある。

本種が日本から記録されたのは狩谷精又氏の佐賀県からのものが始めての様である (農事改良資料

第40号、1932. 同55号、1933)。このことは湯浅啓温博士が解説され(昆虫、Vol. 13, No. 5/6, p.199-202, 1939) 同時に本種の福岡、長崎両県と朝鮮、樺太産も報じておられる(土井久作氏が樺太産で *Crioceris nigritarsis* と新種記載された種—動物学雑誌 Vol. 47, No.479, p. 372-373, fig. 1, 1928—は湯浅博士によりこの種のシノニムとされている)。

GEMMINGER et B. のCatalogus Coleopterorum Tome X I. Chrysomelidae (Part. 1)、1874によるとヨーロッパでは多くの変種があり(p.3264-3265, *Crioceris* 属)、H. CLAVAREAU の W. JUNK Coleopterorum Catalogus Pars. 51, 1913 によると分布が Europa, Asien, Mexiko, Brasilien となっている(p.48. *Crioceris* 属)。

朝鮮での記録は前記湯浅博士のもの以外に中條博士のもの(Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa. Vol. 30, No. 204, p.350-351, 1940. *Crioceris* 属)があり、岩本新一氏が金剛山に産すると報じたカラフトアカハムシ *Crioceris nigrotarsis* DOI (Study of Insects, Vol. 1, No.1, p.19, 1937) も本種のことである。

中国大陸からの報告は J. L. GRESSITT & S. KIMOTO 両博士による The Chrysomelidae (Coleop.) of China and Korea Part. 1, Pacific Insects Monog, 1A:54, 1961 の中で中国、朝鮮の産が記録されていると共に JUANJI. T, et al. Economic Insect Fauna of China. Fasc-18, p.86-87, pl. VII, f. 67, 1980にもカラーで図説中国での産地が入っている。

台湾からは中條道夫博士が初めて記録された(Tech. Bull. Kagawa Agr. Coll. Vol. II, No. 2, p.85-87, 1951)。

九州からは割合と産することから早くから記録があり、九州での生態の発表が高倉康男氏(北九州の昆虫、Vol. 8, No. 1, p.1-2, 1961)、日野隆之氏(採集と飼育 Vol. 23, No.1, pp. 22-23, 1961)とある。

本州からの本種の記録は水戸野武夫氏が島根から記録されたのが始めてではないかと考えられる(新昆虫 Vol. 9, No. 10, p. 29, 1956. 和名のみ)。

中條道夫・木元新作両博士による Systematic Catalog of Japanese Chrysomelidae (Coleoptera)。 (Pacific Insects Vol. 3, No. 1:126, 1961) にも本州、九州を分布にあげられているが、具体的な産地は出ていない。

木元新作博士の The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands II (Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ. Vol. 13, No. 1, 1964, p.133) でも日本(本州、九州)が分布とになっているが九州産の具体的な産地はあっても本州産の産地は全く示されていない。

本種の図説は夫々原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫編)(中根猛彦博士担当。pl. 161, f. 15, p.322, 1963)、原色日本甲虫図鑑(IV)(木元新作博士担当。pl. 30, f. 6, p.155, 1984)に夫々カラー

で図説されているが分布は本州、九州で四国の分布が知られていないようである。

高倉氏は前の報文で手許に岩田久二雄博士採集の兵庫県篠山産の標本があるとされており（データ無し）、大野正男教授は南会津と林匡夫博士採集の大阪府能勢産の各1頭を記録された（昆虫と自然 Vol. 15, No. 8, p.44, 1980）。以上が筆者の知り得た本種の本州からの記録であり、本州からの記録は他にもあるのだろうと思うが可成り少ない種の1つのように思われる。



ユリクビナガハムシの
国内分布記録地

兵庫県下での記録は前記篠山が1例あるだけの珍しい種になると思われる。

ところが三木市口吉川で永嶋嘉之氏が可成り前に本種のいることを確認され、その後稲見 誠氏も同じ所で採集しておられる様で（永嶋嘉之氏はその内の1♂をわざわざ1989年10月29日拙宅へ持参、見せて下さった）。稲見 誠氏採集のものは1989年10月28-30日神戸市立青少年科学館で開催された日本学生科学賞兵庫県審査出品展に出品された10exs.（三木市口吉川町大島産、1ex., 19-VI-1988, 6exs., 26-VI-1989, 3exs., 10-VII-1988）を見せて頂いた（稲見 誠氏の同級生西田雅昭氏の私信によると他にも採集されているようである）。その生態とか発見、産出の経緯とかは永嶋嘉之氏が詳しく報告して下さいと思うので、この珍しいハムシが県下には意外と多くいることを此処に報告させて頂く。

尚、食草は九州の佐賀県ではクロジクテッポウユリ、アオジクテッポウユリ（湯浅、1939.日野、1961）。福岡県でテッポウユリ（高倉、1961）が報告されているが、永嶋氏の御教示によると、三木市ではコオニユリとオニユリからのみ採集出来て、テッポウユリ、カノコユリ、ササユリ、チゴユリ

などからは見出したことがないとのことであった。

末筆ながらこの珍しい種の分布を御教示下さり、さらに日野氏の報文を教えていただきコピーまでして下さった永幡嘉之氏に厚く御礼を申し上げる。

ユリクビナガハムシの採集例

永 幡 嘉 之

ユリクビナガハムシ *Lilioceris merdigera* (LINNÉ) はあまりその名を知られていないが、鮮紅色の美しいハムシである。私は小学生の頃(1980年頃)から、アカクビナガハムシによく似た別種がいることに気付いていた。その後追加記録も出、また県内では篠山町での1例しか記録がないことも分かり、今回三木市内での本種の記録を報告したい。

<採集例>

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 三木市口吉川町善祥寺。 | 1♂、1♀。5—V—1984、永幡嘉之。 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 19—VI—1988、稲見 誠。 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 26—VI—1988、稲見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 10exs., 10—VII—1988、稲見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 30—IV—1989、稲見 誠 |
| 三木市口吉川町大島。 | 1 ex., 10—VII—1989、稲見 誠 |
| 三木市本町。 | 1 ex., 24—V—1989、永幡嘉之 |

さて、三木市内の本種について考える上で最も重要なのはその食草である。大島ではオニユリとのことで、善祥寺、大島でもオニユリかコオニユリのどちらかにはいた。だが、当時はムカゴの有無にまで注意を払わなかったのでどちらか分からない。ただ、善祥寺では丈は低いながらもムカゴはついていたように記憶している。とにかく、オニユリ類であることは間違いなく、その種類の確認が今後の第一の課題である。

生息環境は、本町では山裾の畑地、大島では庭園内、善祥寺でも山裾の庭内であった。いずれの地もかなり自然度の高い所である。

次に、オニユリとコオニユリが三木市内にも自生しているかしていないのかということ調べてみ